

授業記録と抽出見に拠る授業研究に関する研究

田上, 哲

<https://hdl.handle.net/2324/1398439>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（教育学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏名・(本籍・国籍)	たのうえ さとる 田上 哲 (佐賀県)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	人環博乙第62号
学位授与の日付	平成25年5月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	授業記録と抽出児に拠る授業研究に関する研究
論文調査委員	(主査) 教授 八尾坂 修 (副査) 教授 新谷 恭明 教授 竹熊 尚夫 教授 吉本 圭一 教授 山口 裕幸

論 文 内 容 の 要 旨

現在、世界的に評価されている日本の校内研修的・校内研究的な授業研究であるが、それは日本の授業研究の一側面に過ぎない。日本における本格的な授業研究の始まりについては、従来、外国の理論に基づく大学における研究、学習指導要領に対抗して自主的な教材開発を目指す民間教育運動における研究、教育行政の指導する公的な研究の3つに整理

されてきた。しかし、そういった整理になじまない研究、すなわち外国の理論に頼らない大学における研究（重松鷹泰の「授業分析」や上田薫の「授業研究」）や教材開発を主眼としない民間教育運動における研究（社会科の初志をつらぬく会（以下、初志の会）の「実践研究」）がある。一人ひとりの子どもが判別できる授業記録・教育実践記録を資料とし、数名の子どもに焦点を当てる方法（抽出児）を用いてきたそれらの研究は、言わば一人ひとりの子どもの事実から立ち上がる授業研究である。しかし、こういった一人一人が判別できる授業記録や抽出児の意義については、十分に解明されてこなかった。そこで本研究では、まず、一人ひとりが判別できる授業記録と教育実践記録、抽出児について、記述研究を通して、その研究的意義や実践的意義について基礎的な考察を行った。次に、その一人ひとりが判別できる授業記録に関して、複数の記録を分析するためのツールと、その記録に基づく抽出児の選定方法を開発した。そして、保存されている授業記録（主に初志の会に関係する記録並びに重松が全国から収集した記録）を対象にして、記録に基づく抽出児の選定による事例研究を行った。

授業記録・教育実践記録に関する基礎的考察では、まず、授業研究の第一次資料である授業記録に関して、授業研究における授業記録のあり方について検討し、一人ひとりが判別できる逐語記録を中核として、様々なデータをリンクさせる総合的な授業記録モデルを提示するとともに、授業記録を媒介にした授業研究における研究者（教育実践研究機関）と実践者（教育現場）、研究者（教育実践研究機関）相互協力体制の可能性について検討した。あわせて、教育実践記録の作成主体と研究（検討）主体の問題、記録における事実と解釈の問題を検討し、二つの活用（教育実践の改善のため／教師自身の自己更新のため）の方向を示した。さらに、初志の会に所属した代表的な実践家の授業記録ならびに実践記録（叙述）を対象として、問題解決学習の授業における子ども理解と、子ども理解の変化に伴う教師の変容について検討した。前者では、授業記録に記載されている教師のつぶやきの分析を通して、授業実践で教師の子ども理解がどのように働くのかを明らかにした。後者では、全国的にも著名な二人の実践家の教職経験上のターニングポイントでの子ども理解の変化とその後の教師の変容について検討し、教師の二つの（技術的熟達者と反省的実践家）への変容の方向性を明らかにした。

次に、抽出児についての基礎的考察として、まず初志の会の実践研究における抽出児の実態について分析するとともに、特別支援教育における対象児との比較を通して、抽出児の原理や機能について考察した。前者の分析を通して、抽出児は日頃から気にかかっている子どもであり、そして授業の構想展開評価の手がかりとなる子どもであること、後者の考察から、対象児は外部の基準によって選定されるのに対して、抽出児は教師や授業集団の内的な基準で選定されるものであるということ、また抽出児には、抽出児と他とのかかわりを追究する関連追究機能と、実践や自己の指導や子ども理解に関する省察機能があることがわかった。そして、抽出児の具体的な働きについて、実践的な側面では静岡市立安東小学校ならびに初志の会の実践記録を資料にして、関連追究的な働き（授業デザイン）と省察的な働き（授業実践の省察）を、研究的な側面では幼稚園教育の事例を通して教師教育における事例研究での省察的な働きについて明らかにした。これらの検討を通して、抽出児が実践的にも研究的にも、重要な働きをするものであることが明らかになった。

以上の基礎的な考察を踏まえ、一人ひとりが判別できる授業記録と抽出児に関して、授業研究のためのツール・方法を開発した。まず、一つの授業集団で実施された長期にわたる一連の授業について分析するためのツールとして、発言表から個人別発言表と発言関係表を、また、一人ひとりが判別できる授業記録の処理を介して発言の量と質の観点から抽出児を選定する方法を開発した。これらのツールや方法は、出版されたものや過去の実践

記録であっても、それが一人ひとりを判別できる記録であれば、適用することが可能である。そこで、初志の会の実践記録と重松が全国から収集した授業記録を対象として、授業記録処理を介して発言の量と質の観点から抽出児を選定する方法を用いて、4つの事例研究を行った。第一に一つの授業集団で同時期に行われた、国語、算数、理科、社会、道徳の5つの授業について、その授業集団のその時期の授業をそのようにならしめている抽出児の働きや抽出児と他のかかわりについて検討した教科(および道徳)授業の横断的研究、第二に初志の会所属の5名の実践家の低学年社会科「バスの運転手(士)」の授業記録を対象にして、授業における人と人との関係を中心とした諸関係(教師-子ども関係、子ども相互の関係、および教師・子どもと授業の内容・手続きとの関わり方)を比較した同単元授業の比較による関係性の追究、第三に国語の物語文の読み取りの授業について、事前事後の作文の処理を併用して子どもたちの認識がどのように再構成されたか、抽出児がそれにどのように働いたかについて分析を行った事前事後作文の処理を併用した子どもの認識の再構成の追究、第四に5、6年生持ち上がりの学級でキーパーソン的な存在である抽出児が実施された学級活動の複数の授業でどのように働いたかを検討した学級活動の縦断的研究を行った。

本研究を通して、一人ひとりが判別できる授業記録・教育実践記録ならびに抽出児の実践的研究的意義の解明、ならびに一人ひとりが判別できる記録について、複数の記録を分析するためのツールと、その記録に基づく抽出児の選定方法の開発について成果をあげることができた。しかし、本研究では、書き残されてきた記録を研究対象にしており、個人別発言表や発言関係表、授業記録処理を介して選定された抽出児が、実際に現実の授業実践やクラスルームプロセスにどのように有効に働くかまでは、検証できなかった。この点は本研究の限界であり課題である。また、あわせて今後の課題として、総合的な授業記録モデルによる記録の作成とそれに基づく分析、発言表・個人別発言表・発言関係表等のツールからの発展としてデータを様相的に処理することの理論的実践的研究、授業記録(の作成)や抽出児(の検討)と教師の成長の関連についての研究、あえて一人ないし数名の「個」に焦点を当てる授業研究・教育実践研究の理論的基礎付けをあげることができる。

論文審査の結果の要旨

これまで日本の授業研究について、欧米の理論や実践に基づいたものや、教材の開発を目指したものがその主流と考えられてきた。それに対して、本論文は、外国の理論や実践に頼らない、教材の開発を主眼としない、子ども一人ひとりの具体的な事実に基づく授業研究に焦点をあてたものである。第一に、そういった研究に共通して用いられ、そしてこれまで取り立てて十分な検討がなされてこなかった、一人ひとりを判別できる授業記録と一人ないし数名の子どもを手がかりにする抽出児という方法について基礎的な考察を行った。第二に、一人ひとりを判別できる授業記録に関して、長期に亘る複数の記録を分析するためのツールを開発するとともに記録に基づく抽出児の選定方法を確立した。

まず、授業研究の第一次資料としての授業記録について、作成目的ならびに作成主体と検討主体、再現性と伝達性、活用可能性等の視点から、一人ひとりを判別できる記録の有する意義を明らかにし、その可能性について検討している。抽出児については、実践記録の分析ならびに特別支援教育や療育で問題にされる対象児との比較を通して、その原理と機能について明らかにしている。

次に、これまで困難であった長期に亘る複数の授業記録の検討のために、抽出児個人の発言状況と抽出児相互の発言のかかわりを見渡すことを可能にする、個人別発言表と発言関係表というツールを開発している。そして、事前に大掛かりな準備を必要とした、あるいは基準が曖昧であった抽

出児の選定方法に関して、テキストファイル化した授業記録へ文字処理を施して、発言の量的質的偏りの観点から選定する方法を確立している。

一人ひとりを判別できる授業記録の意義ならびに抽出児の原理と機能を解明したことにより、子ども一人ひとりの事実に基づく日本における独特の授業研究を価値づけている。また、一人ひとりを判別できる授業記録に関して、複数の記録を分析するためのツールを開発し、発言の偏りの観点から抽出児を選定する方法を確立したことにより、授業研究を重要な領域として包括している教育方法学において新たな研究方法論を提示している。あわせて、これまでに保存されてきた授業記録の活用や今後保存すべき授業記録のあり方にも示唆を与えている。以上により、本研究は理論的にも研究方法論的にも教育方法学研究において重要な貢献をなすものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位に値するものと認める。